孫門

加賀藩
直傳全

暦

きんめいてんのうのけだいにあたるひとびとの
ていしゃくのなかにおいては
おのおのの位にあるものは
持統天皇と
ともにしたがいつかえ
くらいをあたえられることをもとめる
ことをもとめられたものは
めぐみひろくおよぼされた上天皇と

暦

乾坤開け萬物生ず。形象饒かなる時津國。抑も人皇四十一代は。持統天皇と祝し世の御政正しく。鰥寡孤獨を憐み飛龍殘疾を救はせ給へば。諸天の惠みひさかたの太上天皇とオヨシはじめて崇め奉る。地朝暮玉座の左右には。大納言の輔少納言の輔二百餘人の宮女まで。衣紋のかざし色映えてフシ御殿輝くばかりなり。時の關白には鷹司の公經に從ひ諸卿冠を上げざりき。扨又天下の記錄者として三條前の中納言兼政。大伴の朝臣忠頼此兩家として。國土の善惡を糺され治まる時も今日は早や。白鳳二年卯月一日になりしかば。上一人より萬民まで。着替へて今朝の薄衣錦の袂飜へす。歌春過ぎて。

加賀椽直傳

夏來にけらし白妙の。衣ほすてふ天のかく山と。御製の風か曙も。いまだ霞の八重立ちて　フシ夏の風情はなかりけり。げに去年詠みし歌のさま。此景色には本意なからんとの宣旨なり。かゝる折節天文の博士。木津良の廣信傳奏を以て奏するは。詞そのかみ欽明天皇の御宇に。新羅百濟國より暦の秘書を渡し畢ぬ。それより世々を經て例へば日月のめぐり。又は節の變る事つら〳〵これを考ふるに。一年の行事にさへ一日四分度の一刻程縮まり候。さるに依つて萬木千草の開落まで悉くたがひ。時候さんれい切ならず。地色願はくは新暦の二卷。元嘉暦儀鳳暦にして年中晝夜の呼吸まで。審かに仕うまつりなば。萬人の喜び末世の重寶ッシ是に。過ぎすと言上す。君聞し召され誠に欽明の暦書程經れば。此度暦の改正すべし。則ち當國の大社なれば三輪と春日に參詣し。萬神慮に任すべしと。兼政忠頼に勅命あり御簾は下らせ　三重へ給ひける。フシ古き軒端に。地色名を埋む高橋の宰相吉連とて。先帝天武に仕へ給ふ人なるが。定めたき世の定めとて廿二歳にて死し給ふ。されども筋なき腹に忘形見ふの姫君ついゐ宿らせ給ひ。蘭帳の内に銀燭の光を受け。秋の夜月も明けやすく。スイチ春さへ日影暮れ早く。地あてなる遊び品かへて。玉琴玉筆ッシ玉手箱。地色悔しや昔忍ぶの草宿は。さながら野となりて梟松桂の風の外。高家の一類もましまさねば。吉連の息女ぞと申し上ぐべき便りもなく。侍人まで見捨て行きしに。やう〳〵乳人の玉水が。流れを汲みて源

を濁さず。嬰兒總角の御時より育て奉りてうつくしみ。娥皇女英の古を欺き フシ見し人。消ゆる。露なれば。朝顏の姫と御名をなかばに變へけるが。今思へばよしなやな所もしかも朝日の里。この儘萎ませ給ふかや我こそ賤しき腹を貸し奉れ。父の御名は朽ちまじとらふたけて匂やかなる顏ばせより。繫がぬ玉をはらはらとこぼし。ア、扨うたての憂身の今。さりとては恨めしや。歎かしつらし悲しやと フシ暫し。魂なかりけり。姫も思ひは諸聲の沈みは果てず袖の淵。水なき里にかなはぬは包むに洩るゝ涙川。渡りかねたる高橋の。家は絶え行く女ぞと身の上恨む明暮れの。せめてや憂きを。忘るると。地手飼の鳥の馴染み籠鳥の雲を戀はざる有樣は。スエテげにも優しう見えにけり。地されども此度一天の君の御惠み深き故。生けるを放てと觸れければ。力及ばず姫君はなれも名殘の今ぞとて。手づから籠をあけ給へば遠く遊ばず卯の花の。亂れし枝に羽を垂れて。爰を瀨に瀨にほとゝぎす樣々聲を 三重 〻重ねる フシかゝる所に。地かつて目馴れぬ田夫野人とがりおふこに鎌を携へ打連れて來りしが。此鳥を見付け何の苦もなく捕へしを姫は垣間見走り出で。詞なうそれやこちのぢやが何故捕りやる。田夫ども聞きも敢へず。何羽のあるものをこちのとはどこから許しを取られけるぞ。地扨も世界を我儘なる言分と フシ一度にどつと笑ひけり。地色げに尤なりさりながら。心ありての放ち鳥平に許せとありければ。詞小憎き男子して。心ありとはこの男の内いづれか思ひ付き給ふ。相性よくば入聟にといへば又一人進み出で。いや〳〵無用の緣組いかなる賤しき女ぢやも知れず。地色兎角論をやめて今日立つ市の味酒も。今宵は是を肴にと一つなる口々に。雜言はけば姫君堪ゆるに堪へられず。守刀を拔きそばめ打つてかゝれば田夫ども。いや大膽なる小女郎め只打殺せとひしめく所へ。兼政春日の下向なりしが此由を御覽じて。詞やあ〳〵こは何事ぞと宣へば。地色母はお馬に趨り始終を申し上ぐれば扨々につくき爲業かな。王城近くありながら今度の御觸れ聞かざるか。殊更人家の狼藉かれこれ以て重罪なり。一人も遁すなと宣ふ聲に驚き フシ皆ちり〴〵に逃げてけり。地色母は餘りの嬉しさに扨有難やお蔭にて。姫を一人まうけしと手を合せ禮すれば。ヲ、目出度し〳〵仕合せと。宣ひながら姫君に移し心の遣瀨なく。スエテ胸ときめけどいかにとも。フシ詞をかくべきよすがなく。扨も咲きたる卯の花かな。あれ一枝賜れかし土產にせんと宣へば。あつと答へて姫君惜しげもなく手

折りつゝ。差出せしが暫らく扣へ持ちたる花を打眺め。うつゝなや自らは日陰に委む身にし故。明暮れ心うの花と眺めをりしに縁とて。都へ貰はれ行きぬるか扨羨ましあやかり物と。しを〳〵として差出す手を花共にじつと締め。いや此花は媒介よ。誠は御身の花の顔。幾重に思ふ縁の紐さはりなき時蔭に來て。姿の雷手折らんに必ず忘れな忘れじと。互に詞を殘しつゝ別れ〳〵て三歩へ歸らるゝさる程に。地大伴の朝臣忠頼は一家一族召集め。詞此度記錄の兩家とて暦の改正仰付けられ。兼政は儀鳳暦某は元嘉暦を差上げしに。兼政が儀鳳暦拔群勝り。一々道理に徹し言句絶すの所なりと是に御詮議極り。則ち兼政を飛鳥の大納言に任ぜらるゝ事全く彼が學德の厚きにあらず。是皆闘白公經が取持つ故なり。其上重ねて宣旨あり。富士の高嶺に五丈八尺の赤銅の柱を立て。三日三夜の晴天を見合はするよし彼是以て當家の滅亡。地所詮兼政と差違へ浮世の妄執はらさんと。思ひ定めて暇乞ひ フシおの〳〵。慘乎鎭まれり。地爰に豐浦の虎若とて。忠頼が甥なりしが世上の人を人ともせず。公家とも武家とも片附かぬ傍若のをこの者進出でて申す樣。詞御憤り至極せりさりながら。死して再び歸る身でなし先づ此事は思召しとまらせ給へ。某が計ひにて彼奴めを一人轉びさせ。こなたは世に榮えるてだて但し厭かといへば。やれ虎若それこそ望む所して。其手段はいかに。いや〳〵お前にては憚る事あり。地先づ兼政が書いたりし色紙あらば賜るべし。某先だつて駿河に下り思ひ付きたる計略それはその。かゆき所を掻く如く御本意遂げさせ申すべし。心安く思召せと扨同じ心の浪人に。戸無瀬の宇右衛門語らひて其内談を牒す内。はや兼政の富士禪定彼の赤銅の柱をば。引出すと告げければやれ遲なはりて詮もなし。兎角は路次の相談ぬかるな宇右衛門急げやヲ、。〳〵。〳〵。ヲ、おつとせくまい此智略。粹をこかす乙媒まらする一人轉びぞ勇めや。〳〵いさめと打連れ。館を出でにけり。

第二

地通路や姿の入物三枚肩。舁夫が急げば中宿の。貸編笠の目つけ紋丸の内に二つ星。是も逢ふ夜は織姫の フシあまの安箸川徒歩わたり。嬉しや誰やら招きぬる。手越の新七末社にて粹の出立の替衣裳。男自慢や戀知りやわけよき都の大臣と。虎若や宇右衛門はばつと出口の茶屋よりも。先へ知らせて待つ幕に揚屋町へぞ三歩へナゲフシ恨みながらも。月日を送る。さても命。はある。もの フシ嘘でかため

し。身の勤め。是いたづらの（フシ）外ぞかし。扨も我。親のためとて色里に。苦界十年と定め禿の時はすたるなり。扨水あげの初姿。髪も形も替小袖（ホオクリ）しやなら。しやなら〳〵〳〵と歩み行く。素足素顔のなよやかに。昨日にかはり今日よりは。（フシ）宿屋の噂も。様つけて呼びましや。（地）おうお立ちなされませはしくも。跡より遣手のせめくれば（フシ）仕舞太鼓の。遣瀬なく。紋日〳〵の物思ひ。頼む方なき男あまの（冷屋節）いくたび。沈む。身ありの。鐘の別れやまだ夜深きに（ホオクリ）捨てゝ。行かるゝ床ばなれ。好いた男は寝ても。覺めても。夢にも更に忘られず格子。叩くを。合閼にて。懸の中戸の腰掛や。是さゝやきの橋となり（フシ）忍び〳〵の間夫狂ひ。たんと氣の毒ある時は。いつそ殺して貰ひたやア、まゝならぬ世の中に。思はぬ客にも。逢はねばならぬ三瀬川。流れの身こそ悲しけれ。それさへあるに無理口舌。言葉の山に登り詰め。書ける誓紙も聞き馴れて。神も罰をば當て給はず。例へば爪をはなつとて。誠の爪とな思しそよ諸譯知らずのお敵達。賢顔をばし給へど。こちの仲間の仕掛にてつひに身代たゝまする。ましてや親にかかりなど。死に一倍も借りたえて。所の住居もならざると聞けば我から我が心。思ひ廻せば恐しと（フシ）思ふ。ばかりぞ誠なる。扨親方の。手前より。四度の仕着の其外は。皆借錢と積り行く年の暮過ぎわつさりと。正月買の初君は（フシ）神ぞいとしさかはゆさの。餘り〳〵てそれながら。更に勤めと思はれずあはれ。子の日の松ならば根引になりて凌ぎ來るく。る。わの苦患を遊れんと。嘘に誠の物語隨分洒落たる男ども。それはさうよと不便がり白けて。座敷は（三重）へ見えにけり。

（フシ）かゝる所に。（地）虎若宇右衛門ざゝめきて蔦屋は是かと内に入る。細道ながらお通りと亭主が輕口聞き捨てゝ。ばつと座敷に居流れ扨内儀呼び出し近附になり。（詞）新七が知る如く身ども等は此里嘗て不案内。（地色）萬事頼むとゆふ露を。重く打てば押戴き。先づお慰みに女郎様がたを借りてお目にかけうといふ。（詞）いやさ借り者はむつかしき。此所にて隨分張强き太夫を逗留中の約束せよ。（地色）畏り候と女房立てば亭主が代り。問はず語りの高笑ひ（フシ）追従たらゞ〳〵申しけり。（地色）時に虎若いふやうは。（詞）そちは通り者さうなれば。もし都へ上りし時必ず尋ねて來れ。我は三條の大納言兼政といふ者。それなるは聞きも及ばん木津良の廣信とて日本名學の博士なり。此度勅を受け富士にて天の氣を計る。必ず爰へ來る事人に沙汰ばし（地色）して見れな。是は某が自作自筆と彼

の兼政の遊ばせし。色紙を亭主に取らすれば有難し〳〵。子孫までの寶なり。やれ先づお銚子〳〵と手をはたへはたと叩く所へ。松の位の名も高きさんか。さんせき。ゆるぎ出で。上座に居流れ。地色さんせきは先づ盃を改めて。虎若に差しければこは珍らしと一つ受け。乾して戻せばさんせき爰は一つさはりませう。詞虎若眼をするゑなに人の差す盃を突返すは慮外なり。飲むと飲ませうが飲ますともこみつけんと腕を捲つて肘を張る。地色嘴は輕薄笑ひしていやこれ殿様。此所の習ひにてお一つ上げたき挨拶と。様々上手を盡くせどもいやさ。詞いまだ馴染もなきに何の一つ。所詮我を振らんたくみ八幡其手は喰はぬといふ。地色さんせきから〳〵と打笑ひ。扨々素いお客何とも知れぬ仕懸かな。新七さらばと立ちけるを取つて押伏せ。詞なに素いとは誰が事ぞ。地白くて惡くば赤くせんとさんか諸共引寄せて。耳をそぎ髪切ればこは狼藉と騒ぎつゝ。手々に棒を引提げ遁すまじきと犇けば。いや推參なりおのれ等と當る者を幸ひにはらり。はらりと薙ぎければわつというて逃げし間に。首尾こそよけれ宇右衛門と打連れ都に逃げ歸る虎若が仕業の程。詞見る者聞く者押しなべ皆憎まぬ人こそなかりけれ。

第三

眺めなり冨士は日本の蓬萊山。嶺は削りなせるが如く其高さ測られず。斯くて兼政廣信は勅命に從ひて。行屋に入る月出る日を考へ陰陽の高櫓。登りて見れば甲斐が根にスエテ今日も白雲。立ちにけり。先づ正月の山の姿細眉つくる薄霞。春山笑ふかと思はれ聲の鶯初朝の。フシ雪まだ殘る竹取の。翁が娘の。ゆかりかや。誰が結び置く玉笹の。スエテ去年の栞の戀の道。フシ覺えて。迷はぬ人もなし。二月は雲に入る鳥の。オクリ別れや。歎く涅槃の空。釋迦は遺水。遠近の嶺は八葉ともいへり。喜見城の遊樂も。心の月の影二つ。フシ滿つ汐を。荷ひつるゝや。田子の浦。あづまからげの汐衣。いとま浪間のフシうき仕業。彌生は花の吹雪吉野は磯に鳴澤の。景を都にやさ女。駕立てさせて此所スエテたゞは本意なとゆふづく日。西に傾き入間川。平家水に晉あり松に聲。旅の寢覺と名付けたる。琵琶かき鳴らして謠ひける。白日青天も賴まれず。朧の夜の山見えぬは。人の心の雲。櫻に嵐。月に雨。世にやナホス哀れの。まさるらん。フシ卯月はさくや水車の。浮嶋が原行く螢。里の童の打止めて。光を埋む玉澤の。水雞や叩く川遊び。淺瀬の沼の花がつみ。笛に太鼓に風車。おのが様々。日

ぐらしや。五月の空は梅の雨。晴間の山を繪に書きて。いさ唐土の。人に見せん扇面。さかしまの美山なりと喩へて。爰に詩を作る。世々の歌人の眞砂の種。神代に蒔きて盡きせざる末は興津の川社。さて六月は富士詣で。白衣の袖はさながら雲。難行難所攀ぢ登る懺悔々々六根懺悔おしめに八大金剛童子。南無淺間大菩薩。さつと消えにし罪科も其夜。ふりつゝ絶えぬ氷室の谷深し。七月は七夕の。逢瀨ありとやいざ來て三保の松原越えてエ。松原越えてエ。清水寺鐘の拍子がちやん。〳〵としてさて面白い。面白いぞや類ひなき。猶望月の今宵しも。二千里の外の故人の心言葉も。いかで及ばんと。眺めに飽かぬ中空に初雁。がねの雲間より。ちら〳〵〳〵〳〵と連れて。鳴く音をきく月は。四方の山々色どりて。今車を駐めてそゞろに愛す楓林の暮紅葉を焚けば煙の山これ。あたゝめて酒飲む時は。劉伯倫が樂みも。終に事足る盃。三國一ぢや酒になりすまいた。さて十月は。山路昨日時雨して。急ぐ足柄箱根なる。葉守の神の瑞籬も梢淋しく霜。月は猶木枯の。森の下枝の白妙に。それとも知れず すくみ驚。身の色こぼす曙に。せはしき聲の枕より。旅泊の夢の覺めて行く年の暮には。野も山も雪に。風情を奪はれて枯れ。〳〵枯れ柴眠りける。それが上にも霙。霰のと絶えなく願ひの晴天あらざれば。兼政廣信心中に南無大日大權現。主上の爲の御方便奇特を顯はし給へやと。天に向つて祈らる時に風雲晴れ續き。日月和光のめぐりをつもつて喜び。勇み山下あり。大和の國へぞ急がゝ。是はさて置き。既に其年も除夜の暮にぞなりにける。大内の御儀式松立て飾り御垣守。衛士の焚く火の輝き南殿には。陰陽師集りて祭文を讀上ぐれば。仙華門には大舍人寮鬼の形を へ勤めける。殿上人は。桃の弓に葦の矢をつがひつゝ 邪氣を射拂ひ給ひける。抑も追儺といふ事は。年中の疫を拂へる行事なり。さて御吉例の衣配禁裡の御作法官女の給仕に。帥の輔とておはせしに。かの朝顏の姫父の御名を深く隱し。帥の輔に從ひ御名を宮内と替へさせられ。官女の業を習ひ給ふに秀れて賢くましませば。帥の輔も賴もしく我もはや寄る年の。物事うとくなりぬれば。新院樣の御事どもそなたに賴み參らすべし。先づ此衣の色品も覺え給へとありければ。人も多き其中に。宮内は時の面目と廣蓋に千代重ね。模樣さまゝ御所染の色は へ春とぞ。見えける げに初色の。梅重

ね。地表も裏も濃紅にオクリ入日の。鳴戸立波を白糸の貝づくし。鳴に洲崎に立つ鳥の ッシちりやちりちり縮緬は。檜桓の左大臣道綱。さて松重ね青かりき。うら吹き返す。ゆるし色。鞠に柳のたよたよと。亂れて〳〵。繻風の。袖より落つる結び文。誰様参ると見てあれば。近衛前の入道則房なり。次は地なしに唐花の。五色の下葉玉の枝。玉の忌桓のあざやかに千早振る〳〵。振つた所がどうとも。斯うとも。フシ厭といはれぬ袵の。スエテつまり懐しやなつかしや。是はどなたと見てあれば。西門院橘の照政。フシ優しや裾に。春の野の。雉子の床の草隠れ。萠黄の袂腰がはり。菊桐並ぶは古川の権中納言正家。末に流るゝ水車くるり。くるりと纏はるゝ。藤のかけ波ぬしやたれ。大伴の忠春なり。地色帥の輔聞きも敢へず不思儀や此御小袖は幾年か。三條の家に下し賜はるが若しも筆者の誤りかと。宣ひも敢へぬに本宮の中將さゝやき寄つて。詞いやなう世は知れぬものかな。大納言兼政と博士木津良の廣信は。此度駿河の國にて不儀なる様々洩れ聞え。本坂藏人増田式部に預けられ流人と成つて配所へと。地色語りも敢へぬに姫君はつとばかりに伏沈みスエテ人も咎むる涙なり。地色帥の輔見給ひて宮内は何を歎かるゝぞ。我こそ兼政殿の母上のお取立て故により。斯く宮仕へも仕ふまつれば外の様には存ぜぬなり。誠に日もこそ今日の暮れ明日は改む春なるに。御いとほしや哀れやと フシ深く。悔ませ給ひける。地色姫君今は前後を忘れ。御涙にくれながら。今迄は深く隠し候へども。最早名乗らん自らは。高橋吉連が娘朝顔の姫なるが。兼政殿と申交せし事ありと。あらまし宣ひ果てざるに帥の輔大きに驚き。なう今迄はゆめ〳〵知らず様々に。心ならざる慮外の身たゞ御許し給はるべし。諸事はかゝる折なれば御慎みおはしませ。此上ながらも自らに御任せあれと。よきに諫めて住馴れし局をさしてぞ 三重へ入り給ふ斯くて増田。地本坂は佐保の川のあたりにて兼政廣信に行逢ひ。地鬼角の仔細は存ぜねども。兩人ながら流罪の宣旨我々承りて候といへば。兼政の郎黨岡崎平内平七大きに怒り。宣旨とは何の科あつての流刑。ヲ、今思へば駿河にて風聞せし忠頼めが讒言よな。例へば我我づだ〳〵に刻まるゝとても此實否を糺さずば。君を都へも入れ奉らじ方々にも渡すまじ此。佐保川こそ配所なれ。斯くいふが憎しとて必ず手向ひして後悔すなと。地二王立ちに立つたるは ッシ面をあはせんやうもなし。地色兼政暫しと鎮めさせ給ひ。尤も汝等が憎いことわりなりさり

ながら。たとひ無實の讒にもせよ勅に向ふは勿體なし。我身に塁あらされば。つひには月の都にて晴行く空を侍てやとて。涙ながらに宣へば流石勇める兄弟も。御一言にてしを〳〵と　フシ途方を。失ふ其隙に。地色警固の武士取圍みはや遠ざかれば弟の平七。こは無念と駈出づるを平内取つて押しとめ。詞やれせくな平七。地色察するに讒人は忠頼に紛ひなし。とても死ぬべき命ならば忠頼虎若諸共に。路次に待受け斬るものか。夜討に入つて討つものか安穏にては置くまじき。暫し〳〵と言ひながら片時も遁し置く事の思へば。思へば無念やと血の涙をはらはら〳〵。はらり〳〵と流しつゝ打連れ一先づ歸りける兄弟が心の内。ことわりせめて尤もやと感ぜぬ。者こそなかりけれ。

第四

痛はしや兼政は罪もなみ路の物思ひ。赤松のいろは船四十八番並べたる。中にもお召大船とて竹虎落網をかけ。或は刃物を改めらる　フシ流人の身こそ悲しけれ。地所はしかも難波津や。梅の濱より押出す然る所にさもけはしく。詞なう〳〵お船〳〵。地色其船待たれよお船よと。呼ばはる聲も程近く。見れば白き小袖に淺黄袴を着連れたる。小人やう〳〵磯邊に驅著き二腰脱ぎ捨て手をつかね。詞是は大納言殿に召使はれし右丸左丸と申す悴どもにて候。地色かゝる時の御供をこそ。御情にて頼み奉ると　ツヨチ涙と共に申しけり。地色定元船ばりに立出て。詞ヲヽ志は神妙なれども。これ私ならねば叶ふまじきと答ふ。なにお船へは叶ふまじきと宣ふかや。地色さても是非なき次第然らばお船暫らく待つて給はれ。詞いかに左丸。君自然の御時は殉死の契約今なり。地色死別るゝも生きて別るゝも同じ思ひ。いざ御目前にて腹切らんと支度するを兼政御覽じ。詞やれ待て汝等暫し〳〵。地色誠に若契の好とて。淺からざる心底　ツヨチ返す返すも嬉しけれ。地色世にある時の二眺め。花に紅葉に代へて我つまなし千鳥の床の海。情に沈みし浪枕の。戯れし夜の誓ひにも三つある命行く水の。消えなば一度に泡沫と。言交せし甲斐もなく一人殘して沖津石。頼む島なき身なれども命だにあらばなれ。死ぬな右丸必ず死ぬな左丸。死なば恨みと身を悶え　フシ口説き歎かせ給ふにぞ。背て衆道を辨へぬ。むくつけ男捧取まで　フシ女の。情忘れける。地色定元見る目も痛ましく。たとへば後日の沙汰にあひ生害に及べばとて。いかに哀れを知らざらんさりながら。詞二人

はいかゞ何れにても一人乗られよとあれば。地色兩人大きに喜び我乗らん。いや我こそと押退け。押止め互に亂れ藻の蟲の。われから人からと泣く音爭ひ時節移れば定元は。詮方なくて艪櫂を早め フシ船は遙かに別れ行く。地色二人ははつと途方にくれなう明石の殿様今は二人と申すまじ。せめて一人と叫べども別れていつか淡路灘。しるしの煙立消えて スエテ物の淋しき黄昏の。フシ星の林となりにけり。地色扨も〳〵しなしたり〳〵。何の詮なき爭ひはあゝ暗きより。暗きに迷ふ思ひの道 スエテ照らし給へや佛國。地色いざや最期を極めさりながら。君刃をとゞめさせ給へば所詮これなる岩に座を占めて。四つの借物を返さんして數珠はあるか。詞いやはたと失念せり。地色ヲ、尤もなり某は持ちたりと。一連二つに引き分ち今まで結びし玉の緒の。絶えなば絶えよ右丸命々鳥の語らひも。はかなく定めし有様は傳へ聞きつる唐土の。伯夷叔齊にも勝るべきいつの日の何時にても息絶え入らば手を擧げよ。臨終一度に舌喰ひ切らんと。夢に夢見る心地して オクリせまるへ日數も重なりて。フシ夕の嵐。朝の霜。地立掛髪の面影は。解けても波の浮藻となり。磨き馴れたる向腐も。落ちて汀の晒貝に交り。芙蓉の背鳥が取り。髑髏に蔦が嚙を爭ひ是ぞ東坡が作る詩の。九つの形の末人の限りの 三重へ淺ましゝ。フシ是も哀れは。地色折ふしの冬野となりし朝顔姫。兼政の遠島を悔ませ給ひ。互に忘れな忘れじと言捨てし詞の末。世にましまさば訪ふまじきが人の情はかゝる時。せめて音づれ參らすべし フシ是非お暇と願はるゝ。帥の輔涙と共にさりとは優しき志。情も義理も此時なりいかでか止め參らせん。心任せとありければ。スエテこは有難き仰せかな。地さあらばお暇申すとて。乳人の玉水伴ひ人見知りてはと變へ姿。オクリ杖あり。笠あり抱帶旅の。振袖 三重

朝顔姫道行

フシ忍ぶ道のべ。くらぶの山の夜もあけず。八入の岡の村鵑。濃きも薄きも戀迷ふ。オクリ閨の錦と。詠め捨てフシ、まだ山かづらを引くかたに。覺束なくも呼ぶ。呼子鳥の傳授は聞かず耳なし山。片輪車に積む柴の。櫻やあたら春惜しむ花の。八重葺。せぬ家ぞなし 小オクリ家も。あらなくに フシ三輪が崎。綾杉めぐむ木の間より。神のひもろぎ物さびて。古りにし事もいそのかみ。人の影さへ。埋れ井の。オクリ井筒に。〳〵フシ玉の。井筒に袖濡れて。わかれ比翼の羽交山。とび立つ方は飛火野や。今幾日ありて旅をさ

め。スエテ我がたらちめ故郷へ。アヒトフシ歸り。三笠山さほのかり。二十五絃は夜月に彈じ。雲井のやどり生駒が嶽スエテ松は時雨の染め殘し。衣のうらに寄せ貝の離れて。逢ふもひめ貝の。嬉しや憂きを忘れ貝フシ蛤仔しほふき。うつせ蛤すだれ貝船は。出て行く。帆立貝。北荒い風をもようやよやよ。夜着いとはれしこ。三津の浦風濱風。ハア寒いぞやア、フシ哀れうき寢の旅の空。今日初島の便りかと。繼渡りぬる武庫の川。心のあさみしらずくし知らぬ道とて。はかどらず誰かつげ野の。つま鹿も人に聞けとや。夜ただ啼く。秋は悲しさまさるべし。それを思へば夢の浮橋廣田の宮。生田の小野の花がたみ。手毎に摘みし。茅花まじりの。つく。つく〳〵ぐし。分けて末黑の薄原。いつか招きて草枕それも叶はぬ世なりせば。執心のつの松原漁火の。燃えあがりては消えては燃え。間なく時なくこりずまの。寢覺に騷ぐ鈴船の。虹は空に夕雨の。身を凌ぎ行く印南野やしづく涙の小石川。君がしがらみ强くとも破れやなぎにやれさて今。あらはれ渡るほの〴〵のこ。か。の浦にぞ着き給ふ憂さもつらさも。哀れさもさもあらめ〳〵。さもこそあらめさもあらめと聞く人毎に押並べ皆絞らぬ。袖こそなかりけれ。

第五

聖賢の世のためし大和の國壺坂に。溫泉一夜に湧出づれば。俄に湯桁の數をしつらひ施藥院を建てさせ給ふ。則ち典藥頭には養じゆ院の法印玄昌。諸國の難病集めさせ給ひしは。君德古今に輝きて有難へかりける次第なり。地色某は丹後の國宮津の者なりしが。世を渡る浦の習ひ獵漁夫の暇もなく。小舟の影消えて波間の鱶に手を喰はれ。斯く淺ましき身の痛みフシたゞ御慈悲とぞ申しける地色我等は山城の國西嵯峨の者なるが。此子を連れて玉鉾の。祇園祭の車に轢かせスエテいたいけ盛の足立たず。不便は親の心なりとフシ涙に。深く沈みける。地色拙者は肥後の國八代にて隱れなき。詞荒岩と名乘りし相撲取。地色四十八手は得たれども大力には是非もなく。上げて落され骨々の碎けて今は小石の。元の巖になり難く。いまだ若きにみつはぐみフシ腰拔け。業と悔みける。地色扨て自らは駿河の國と申上ぐるもお恥かし。安倍川の遊女なりしが年月の勤めに肌を冷し。それ故聲の通はぬは。スエテ情なしとて身を恨む。地色玄昌聞き給ひそれは世になき事にもあらず。詞さりながら傾城の所作とて指を切るとは傳へしが。何とて左樣に耳は切りけるぞ。さん候是は大納言兼政地色殿とやら

ん。いつぞや富士詣での御時逢ひも馴れざる初めの日。科もなき身を此如くさりとは苛酷き御仕方といへば。ア、音高し音高し。何事も昔と思ひ其沙汰する事勿れとて。數多の看病取行ひよきに勞はり三重へ給ひける。地其頃また伊勢太神宮の御造營ありて。當秋九月廿一日遷宮に相極まり。則ち勅使として菊亭の大納言師經。神書の古例を見合せらるゝに。眞の御柱といふ事を書き記せり。諸卿詮議あるに此事正しからず。記錄者忠賴に相尋ねても明かならず。都はたゞ闇の如くさるに依つて兼政廣信を召返さるゝに。いづくか天子の心の海万里の風波靜かにして。はや都にもなりしかばオクリ急ぎ〈參內なされけり。地色時に關白公經右の次第を述べらるれば。兼政謹んで笏取直し。詞抑も眞の御柱といふもの是遷宮の神祕なり。三笠山の松を伐り寸尺の大事。一子相傳なれば是を整へ差上ぐべきとあれば。地國土の寶は兼政とフシ一度にはつとぞ感ぜらる。地色關白重ねて仰せけるは。詞近日御身と忠賴を召上げられ。善惡の御詮議あるべし構へて聽れ給ふなとあれば。地それこそ願ふ所にて候へ。天誠を照らさせ給へば此時晴れなんと。勇みに勇み御前を立ち館をさしてぞ三重へ歸らるゝ。フシ斯くて其日に。地なりければ是ぞ天下の檢斷所。攝家精華を始めとし公家殿上諸司百家。左右へ分つて相詰むる。忠賴方には舍弟忠春同じく甥の虎若。兼政の御方には。廣信つゞきて座を固めフシ風さへ鳴りをぞ止めにける。地色時に關白忠賴に向ひ。詞兼政富士大願の砌。遊女弄びの證據はいかに忠賴承り。さん候なき事をよも安倍川より申し來るべきや。それは兼政の心に覺え候べしとあざ笑つて申しけり。兼政聞召しいや某は覺えなし。かつて跡方なき事但し證據やある〳〵と宣へば。ヲ、證據こそあれ。其時御分遊女に取らせし自歌自筆是にありと。地やがて御前に差上ぐるに兼政の筆跡に疑ひなし。兼政暫らく御思案あり。詞ム、是はいつぞや櫻井の御所の御會にて。逢うて別れの御題に詠みたりし歌なり。其日の披講はそれなる忠春が勁めしが。其時の詠草に紛ひなしと宣へば忠賴聞きも敢へず。いや〳〵いツかに罪が遁れ難きとて出來合の陳情仁體には似合ひ申さず。但し安倍川に櫻井の御所とて又ありや否や。關白暫しと宣ひ。櫻井の御會には兼政いまだ中納言の時なり。駿河下向の刻は大納言に任ぜらるゝに。何とてそれには中納言と記す是不審と宣へば。地忠賴道理に責められてフシ暫らく。返答なかりけり。詞弟の忠春見兼ねいや。其色紙の詮議は兎も角も。安倍

川の傾城を兼政配所まで取寄せられし事。世に此沙汰専らなりといふ時に定元罷出で。なう某預りの内左様の不義は存じも寄らず。ヲ、爰に高橋宰相の息女朝顔の姫とやらん。兼政へ好ありとて遙々下り給へども。中々大納言殿には知らせ申さず其儘追返し申せしが。地色定めて此事をやと申せば各々是は高橋家。三條家の契縁さもあるべきと宣ひ是にても落ちざれば。虎若苛つてつつと出で。詞いさや確かなる證據は既に兼政安倍川にて。遊女が氣儘にならぬとて理不盡に耳を殺ぎ。剩へ所の者に手を負ふせ斬散らせし事都まで隠れなし。かく悪逆の兼政を。歴々御贔屓と見ゆれば何をいうても甲斐あらじ是叔父者人。急ぎ館に歸り分別致されよといへば闘白聞召し。ヲ、理には贔屓あり非には贔屓なり難し。若し此列座に左様の沙汰ばし聞きつる人やある。時に養じゆ院末座にありしが罷出で。此頃安倍川の遊女とて耳を殺がれし者候が。地色是やはと申上ぐればそれ〳〵急ぎ召せとある。畏つて候とオクリ驚て〈御殿に召出し。地色養じゆ院に仰付け此内に其方が。耳を殺ぎし人やあるといへばかの女虎若にひしと縋り。なう大納言兼政様さても〳〵お情なや。科もなき身を此の如く恥ぢ幾度か今日も亦。死なれぬ命と歎くにぞいづれも横手を丁ど打ち。さて恐しき大件の一族人面黙心の積悪罪跡遁るゝ所なし。忠頼忠春兄弟を隠岐の嶋に捨置くべし。虎若は頭をはね公家武家の例にせよ畏つて搦捕り斷罪に行はれさて兼政には朝顔姫を賜り再び照らす都の月。日を追つての御繁昌 千秋萬歳萬々歳。あらたまる年の始めと暦の始め目出度しともなか〳〵申すはかりはなかりけり。

貞享二乙丑歳正月吉日

右此本者依小子之懇望附秘蜜
音節自遂校合令開版者也

加賀掾 宇治澄好

二條通寺町西へ入町
山本九兵衛刊 印

ゆくとまいりてうるわとりあんぐいよおこな
つる掛番頭よりわさぐ月姫と名ゆりふさ
あびてうとうやと月日とおいてれえん
ぎうせんまうぐんぜいぐんくぜいあった
まかとしれてぐあとこのみれてぐあ巻で
あるとしあっくやえりいなりもと

貞享二乙丑歳正月吉日